

秋

群馬県立女子大学名誉教授 北川 和 秀

◎ 前回の宿題

○ 厚見王

系統不明。舎人親王の子とする後世の資料あり。

○ 四一八五番歌の解釈

うつせみは 恋を繁みと 春設けて 思ひ繁けば 引き攀ぢて 折りも折らずも
見る毎に 情和ぎむと 繁山の 谿辺に生ふる 山吹を 屋戸に引き植ゑて
朝露に にはへる花を 見る毎に 思ひは止まず 恋し繁しも(一九・四一八五)

この世の人は恋繁きものなので、春になると物思いにとらわれる。それで、引き寄せて折っても折らなくても、見るごとに気持がおさまるだろうと、繁った山の谷に生えている山吹をわが家の庭に植えて、朝露に色づいている花を、見るごとにかえって思いは止まず、恋心がしきりにわいてくることだ。

(日本古典文学大系) 諸注釈も同様

○ 三九一三番歌の解釈

霍公鳥棟の枝に行きて居ば花は散らむな珠と見るまで(一七・三九一三)

① ホトトギスが棟の枝に飛んで行って止っていたら、珠と見るほどに家の棟の花は散るだろうな。(日本古典文学大系)

② 時鳥よ、お前が奈良の家の棟の枝まで飛んで行って留ったなら、花はほろほろと散りこぼれることだろう。まるでこぼれ落ちる玉のように。(新潮日本古典集成)

③ ほととぎすが棟の枝に行つてとまっていたら、さぞ花は散るだろうよなあ、玉と見るばかりに。(万葉集全注)

④ このほととぎすが その棟の枝に 飛んで行ってとまったら さぞ花が散ることだろうな 玉かと見紛うばかりに。(新編日本古典文学全集)

⑤ ホトトギスが棟の枝に飛んでいって止まったら、花は散るだろうな。玉と見るばかりに。(新日本古典文学大系)

◎秋

【秋の七草】

山上臣憶良の、秋の野の花を詠む二首（秋雑歌）

①秋の野に咲きたる花を指折りかき数ふれば七種の花 其の一（八・一五三七）

②萩の花 尾花葛花 瞿麦の花 女郎花 また藤袴 朝貌の花 其の二（一五三八）

*二首目は五七七五七七の旋頭歌

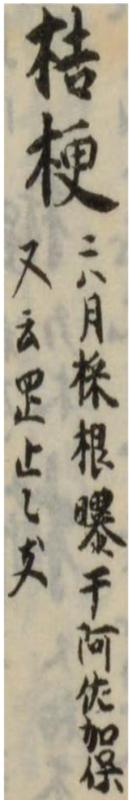
【あさがほ】（ききよう）

①朝顔は朝露負ひて咲くといへど夕影にこそ咲きまさりけれ（一〇・二一〇四）

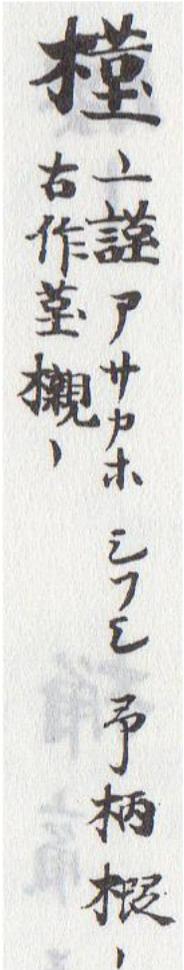
秋雑歌

②言に出でて言はばゆゆしみ朝貌のほには咲き出ぬ恋もするかも（一〇・二二七五）

秋相聞



（新撰字鏡 小学篇字及本草木異名第六十九）



（観智院本類聚名義抄 仏下本一〇九）

【はぎ】

*萩の花は鹿の妻。

大宰帥大伴卿の歌二首（そのうちの一首）秋雑歌

①わが岡にさ男鹿来鳴く初萩の花 嬌問ひに来鳴くさ男鹿（八・一五四一）

*野に自生している萩。

②秋風は涼しくなりぬ馬並めていざ野に行かな萩の花見に（一〇・二一〇三）

秋雑歌

*家の庭に植えられている萩。

かむなきべのまそをとめ
巫部麻蘇娘子の歌一首

③わが屋前の萩の花咲けり見に来ませ今二日だみあらば散りなむ（八・一六二一）

*これから咲く萩。

④わが待ちし秋は来りぬ然れども萩の花そもいまだ咲かずける（一〇・二一二三）

秋雑歌

*満開の萩。

⑤見まく欲りわが待ち恋ひし秋萩は枝もしみに花咲きにけり（一〇・二一二四）

秋雑歌

*露の置く萩。

大伴宿祢家持の秋の歌三首（そのうちの一首）秋雑歌

⑥秋の野に咲ける秋萩秋風に靡ける上に秋の露置けり（八・一五九七）

右のものは、天平十五年癸未秋八月に、物色を見て作れるなり。

*黄葉する萩。

天平勝宝五年八月十二日、二・三の大夫等の、各壺酒を提げて高田の野に登

り、聊かに所心を述べて作る歌三首（そのうちの一首）

⑦天雲に雁そ鳴くなる高田の萩の下葉はもみち敢へむかも（二〇・四二九六）

右の一首は、左中弁中臣清麻呂朝臣のなり。

*散る萩。

⑧真葛原なびく秋風吹くごとに阿太の大野の萩の花散る（一〇・二〇九六）秋雑歌

*その他

天平三年辛未秋七月、大納言大伴卿薨りし時の歌六首（そのうちの一首）

⑨かくのみにありけるものを萩の花咲きてありやと問ひし君はも（三・四五五）

右の五首は、資人余明軍が、犬馬の慕、心の中の感緒に勝へずして作る歌。

⑩ことさらに衣は摺らじ女郎花咲く野の萩ににほひて居らむ（一〇・二一〇七）

秋雑歌

【をみなへし】

大宰の諸卿大夫と官人等と筑前国の蘆城の駅家に宴する歌二首（そのうち
の一首）秋雑歌

① 女郎花秋萩まじる蘆城野は今日を始めて万代に見む（八・一五三〇）

右の二首は、作者詳らかならず。

② 手に取れば袖さへにほふ女郎花この白露に散らまく惜しも（一〇・二一一五）

秋雑歌

【すすき・をばな】

① 人皆は萩を秋と云ふ縦しわれは尾花が末を秋とは言はむ（一〇・二一一〇）

秋雑歌

② 夕立の雨降るごとに春日野の尾花が上の白露思ほゆ（一〇・二一六九）秋雑歌

肥前国の松浦郡の狛島の亭に船泊てし夜、遙かに海の波を望み、各旅の心を働みて作る歌七首（そのうちの一首）

③ 帰り来て見むと思ひしわが屋外の秋萩薄散りにけむかも（一五・三六八一）

右の一首は、秦田麻呂のなり。

【いね】

但馬皇女、高市皇子の宮に在す時に、穂積皇子を思ふ御作歌一首

① 秋の田の穂向の寄れること寄りに君に寄りなな事痛かりとも（二・一一四）

② 稲春けば輝る吾が手を今夜もか殿の若子が取りて嘆かむ（一四・三四五九）

未勘国東歌

③ 鳩鳥の葛飾早稲を饗すともその愛しきを外に立てめやも（一四・三三八六）

下総東歌

坂上大娘の、秋の稲の藪を大伴宿祢家持に贈る歌一首（秋相聞）

④ わが蒔ける早稲田の穂立ち造りたる藪そ見つつ悧はせわが背（八・一六二四）

壬申の年の乱の平定しぬる以後の歌二首

⑤ 大君は神にし坐せば赤駒の匍匐ふ田井を都となしつ（一九・四二六〇）

右の一首は、大將軍贈右大臣大伴卿作れり。

【かへるで】（かえで）

大伴田村大嬢の妹坂上大嬢に与ふる歌二首（そのうちの一首）

①わが屋戸に黄変つ鶏冠木見ること妹を懸けつつ恋ひぬ日は無し（八・一六二三）

秋相聞

②子持山若鶏冠木の黄葉つまで寝もと吾は思ふ汝は何どか思ふ（一五・三四九四）

未勘国東歌

【もみち】（特定の植物ではない。動詞もある。終止形は「もみつ」）

藤原朝臣八束の歌二首（そのうちの一首）秋雑歌

①春日野に時雨降る見ゆ明日よりは黄葉挿頭さむ高円の山（八・一五七一）

②わが背子が白袴衣行き触ればにほひぬべくももみつ山かも（一〇・二一九二）

秋雑歌

橘朝臣奈良麻呂の集宴を結ぶ歌十一首（そのうちの一首）秋雑歌

③黄葉の過ぎまく惜しみ思ふどち遊ぶ今夜は明けずもあらぬか（八・一五九一）

右の一首は、内舍人大伴宿祢家持のなり。

以前の冬十月十七日に、右大臣橘卿の旧宅に集ひて宴飲しき。

竹敷の浦に舶泊てし時に、各心緒を陳べて作る歌十八首（そのうちの一首）

④竹敷の黄葉を見れば吾妹子が待たむといひし時そ来にける（一五・三七〇一）

右の一首は、副使のなり。

軽皇子の安騎の野に宿りましたし時、柿本朝臣人麻呂の作る歌（そのうちの

短歌一首）

⑤ま草刈る荒野にはあれど黄葉の過ぎにし君が形見とそ来し（一・四七）

柿本朝臣人麻呂、妻死りし後、泣血哀慟して作る歌二首 短歌并せたり（その

うちの短歌一首）

⑥秋山の黄葉を茂み迷ひぬる妹を求めむ山道知らずも（二・二〇八）



2241. ススキ (改枚3863)



363. ミヤギノハギ (改枚1300)



1450. ミソハギ (改枚1891)



436. オミナエシ (改枚2880)



1345. カワラナデシコ (改枚401)



431. クズ (改枚1397)

『原色牧野植物大図鑑』による



『原色牧野植物大図鑑』による